

# 中大水泳

# 競泳

# 水球

中大水泳部は記念すべき100回インカレでの勝利を目指す。前回大会では十ッ池本風沙(法4)が得意の自由形で初めて100回を制し、200回での連覇と合わせて100回自由形リレーでは創部後初優勝を挙げた。水球は昨年10年ぶりのベスト4を果たし今年もメダル獲得を狙う。

シユートを決める船水

昨年インカレでバタフライを泳ぐ岩崎幹大(令6卒)



## メダル獲得へ

水中の格闘技、中大は水球部も熱い。関東学生水球リーグ戦では、要となる4年生を欠く中、本来の力が出し切れず、最下位に沈み入替戦へとまわった。しかし成蹊大との入替戦では副主将の森田晃輝(文3)、船水淳希(文3)など3年生が底力を見せ一時は同点に追いつかれるも、接戦を制し1部残留を決めた。1年生の活躍も光り、中大の得点王となった佐賀慶(経1)は相手ゴールへ果敢に攻め込み、入替戦ではチームを救うシュートを決めた。昨年のインカレでは10年ぶりのベスト4を決めた中大水球部。今年は更なる高みを目指しメダル獲得を狙う。

# 100周年の節目に栄光を

# への道

## 「感謝」

記念すべき第100回インカレを前に、中大水泳部「Marauder」の練習取材した。中大水泳部は同大会で通算15回の優勝、そして、いまだ破られていない11連覇を成し遂げた実績あるチームだ。

インカレまで36日。男子が練習する中大のプールを訪ねた。注目したのはミイティングでの選手によるスピーチだ。高橋雄介監督によると、インカレ前には選手一人一人がやるという。「少数精鋭だからこそ、チームワークを大事にした」。この日の担当は赤坂太成(経3)。選手全員が円になり「感謝」をテーマとした赤坂のスピーチに耳を傾ける。最後はマネージャーらも交え陣を組み「中大最強!」の掛け声で気合を込めた。そしてスイム練習へ。3日後には関カレも控える中、アップの泳ぎを調整したり、本番を想定した形で泳いだりするなどみっちり練習を積んだ。

## 未だ破られぬ 11 連覇



レィアウト・高梨晃世  
 昨年のインカレで表彰台に立った池本

## 帰属意識

松川がこう語るの、中大水泳部が寮生活を止めたことが大きい。生活環境の懸念が主な理由といい、寮を離れたことで改善は確かであった。だが主将として、また寮暮らしを経験した身としては「チーム感が失われるのは危惧していた」と、帰属意識への影響に不安もあった。しかし「3、4年生が練習や優勝への思いを伝えることで、総合優勝の目標を1年間追いかけるチームになった」と着実にチームは同じ方向を向いている。

## 少数精鋭

松川も高橋監督と同じく「少数精鋭」と中大水泳部を表現する。他大では100人規模の水泳部もある中で、これは11連覇時代から変わっていない。「誰一人欠かせないのが中大。チーム(できること)を一人一人が考える中で、チーム力が高まっていく」。最後の優勝はちょうど10年前の2014年。逆境を乗り越えた中大水泳部が、100周年の節目にかつての栄光を取り戻す。最後に松川は「キングダム」を引き合いに出しこうまとめた。「少ない人数で強い相手に立ち向かう楽しさや、勝った時の喜びは大きい。その楽しさと緊張感を味わいながら、全員で良いチームを作り上げたい」

(桑沢拓徒)